

【登場人物】

リョウチ（14）……………足のない少年。

イブキ（14）……………目が見えない少年。

カワバタ（35）……………イブキとリョウチが働いている見世物小屋の雇い主。

ユウゾウ（33）……………イブキの父。

いぶき（12）……………イブキの幼少期。

女給（21）……………イブキが訪れた喫茶店の女給。

ラジオ（29）……………ラジオのアナウンサー。

かたみ
傍示 良一（24）……………学徒兵。

しらかわ ひろや
白川 博也（24）……………学徒兵。

小梅（27）……………良一の姉。

音楽・ベルの音

喫茶店・回想。いぶきとユウゾウは喫茶店にいる。2人は舞台両端に立っている。

イブキは舞台中央後方に立っている。

明転

イブキ 「クリームソーダ。君は聞いた事があるだろうか」

ユウゾウ 「どれもおいしそうだな…ん、オムライスも捨てがたい…」

いぶき 「すごい、すごいよ父さん！ 顔中がいい匂いで囲まれてる…幸せ…」

ユウゾウ 「そっかあイブキは喫茶店初めてか。それじゃあ記念すべき今日は何にする？…今日くらい好きなものを食べな」

いぶき 「ん、どうしようかな…」

女給が舞台下手側に現れる。

女給 「お待たせしました。クリームソーダでございます」

イブキ 「ソーダ水は口に含んだ瞬間、冷たいしゃぼん玉がめいっばい広がり、ソーダ水の上に浮かんでいるあいすくりんは雪

みたいに冷たく、とても甘かった」

いぶき 「クリームソーダ…。（興奮気味に）ねえ！クリームソーダってどんなの！」

ユウゾウ 「えっ、あ…：めろんそーだにあいすくりんがのった甘い飲み物…かな？」

いぶき 「おいしそう…ボクそれがいい！ クリームソーダがいい！！」

イブキ 「その日はこれから幸せな毎日を向かえるための、第一歩のはずだった。だから、裏切られた事実が、あの父が自分に嘘

をついたことが、しばらく受け入れられなかった」

ユウゾウ 「わかったわかった…あつすみません」

女給 「はい！ ただいま伺います」

ユウゾウ 「えっと、オムライスとコーヒーを。あと、クリームソーダを一つ」

女給 「かしこまりました。あつ…申し訳ございません、お客様。ただいま、めろんソーだの方を切らしてしまして。別のものに代用してもよろしいでしょうか？」

イブキ 「お金が無いのなら協力したかった。家を出たかったのなら相談してほしかった。……一人にしないでほしかった」
ユウゾウ 「…すごい…まるで、海みたいに綺麗だ……」

イブキ 「最後に食べたクリームソーダ。父が思わず息を呑んだクリームソーダは、一体どんな色をしていたのだろう。そして僕はまた、父と一緒に食卓を囲むことを、許されるだろうか」

暗転

音楽・人がガヤガヤした声

見世物小屋の舞台袖・夕方。

イブキとリョウチは舞台中央にいる。カワバタは舞台下手側にいる。

小屋の外では上演を楽しんだ観客が次々後を立ち去る。リョウチは椅子に座り、ブランケットをかけている

カワバタ 「んじゃあお前ら、そろそろ休憩とつていいぞ。おつかれ」

リョウチ 「あー疲れた！！ もう動けん！！」

イブキ 「お疲れ様。今日はお客さんも多くて忙しかったね」

リョウチ 「だよな。しかも、今日はまだ……」

カワバタ 「あつ、まった。新入りくんはここからここまで、小道具全部片づけてからね」

リョウチ 「はい、ただいま。……つて、これ全部！？ 今から！！」

カワバタ 「おう、夜の公演までには間に合わせるよ」

リョウチ 「いやいやいやいや絶対無理だろこの量！！ あつ、ちょっと！！」

カワバタ、去る。

リョウチ 「…つあのハゲ頭！ 無理強い言いやがつて……」

イブキ 「えーつと、カワバタさんはハゲではないよ。まだ35歳だし」

リョウチ 「イブキ！ お前のナチュラルド天然は今日も絶好調だな。」

イブキ 「なちゅ……聞きなれない言葉だね」

リョウチ 「そうだろそうだろ。なんせ、2024年に発行された本に書いてあった言葉だからな」

イブキ 「2024年！？ つて、今から丁度100年後の世界だよ！ そんな本、どこから見つけ出したのさ！！」

リョウチ 「んーそうそう、小屋の外で休んでいたらポテンって置いてあったんだよ

イブキ 「小屋の外…？（小言で） うち北側は木で覆われているから、僕らが立ち入りする勝手口とか…？ 嫌でもあそこは休む

ほどの広さは無いし…」

リョウチ 「あははは！！ 冗談に決まってるんだろ。なに真剣に考えてるんだよ」

イブキ 「ええー！ 嘘なの！」

リョウチ 「仮にオレが本当に見つけたとしたら誰にも話さねーよ」

イブキ 「…未来のことを知っているのがバレたら人気者になって、今まで通りにおいしい大福が食べられないから…とか？」

リョウチ 「うんうん。近い未来、天才小説家になるオレがこんなところで有名になったら困るだろ、…つて！！ なんで分かつ

た！！」

イブキ 「え、だってリョウチはいつも単純だし。」

リョウチ 「シンプルな悪口！！」

イブキ 「でもさ、あの言葉はどこで知ったの？ リョウチの作りもの？」

リヨウチ「あーあれ、実はユメで見た話なんだ」
イブキ「ユメ？ さつき話していたことが？」
リヨウチ「うん。まあほとんど裏覚えだけど……あつ、その夢にイブキもいたぞ」
イブキ「なーんだ、100年後の本も全部幻だったんだ」
リヨウチ「いや、正夢って可能性もあるぜ」
イブキ「確かに……！ やっぱリヨウチってすごく頭が良さんだね！」
リヨウチ「言っとけ言っとけ……！ だとしたら、さっそく小屋の外に……」

音楽・物にぶつかる音

リヨウチ「いつ……てえ……！！」
イブキ「あれ？ そんなに積み重なってる？」
リヨウチ「ああ……綺麗にドアまでたどり着けないくらい、小道具や箱馬やらで埋まってるよ」
イブキ「ええ……そんな量、一人で片付けるってカワバタさん言ったんだ。リヨウチ、ここは友達として言うけど……多分カワバタさんに嫌われてるよ」
リヨウチ「んなのとくにオレが一番分かるとるわ……！ だからこのクソ忙しい日に頼むんだよ……！」
イブキ「そ、そうだったんだ。リヨウチ、大丈夫？」
リヨウチ「たくつ、ほんとに大変だよ……しかもこれを夜までに……あ、なあイブキ」
イブキ「ん……どうしたの？」
リヨウチ「さつきお前、オレのこと友達って言ったよな」
イブキ「……うん、言ったけど。それがどうかした？」
リヨウチ「お願い……！ 友達なら手伝ってくれるよなあ……！」
イブキ「別にいいけど……」
リヨウチ「え！ マジ！ すげえ助かるわ……」
イブキ「ほんとに手伝うだけで平気なの？ まだ休みもとってないし……」
リヨウチ「んなこと気にすんなって」
イブキ「じゃあさっそく始めたいけど……二人だけで間に合うかな？」
リヨウチ「んー、オレが箱に仕分けてイブキが元の位置に運ぶってのはどう？ 効率いいだろ？」
イブキ「そうだね！ ボクは目が見えないから仕分けの作業は出来ないけど……小屋にある物の位置は正確に分かるから力になれるね……！」
リヨウチ「そうそう……！ 逆にオレは仕分けが出来るけど足がないせいで、荷物を持って移動できないからな」
イブキ「うんうん……！ あれだね、共同作戦だ……！」
リヨウチ「作戦……？ 規模でかくねえか？」

暗転

音楽

時間が経過する

明転

リヨウチ「あーだいたい終わったな」
イブキ「そうだね、後はこれだけ戻して……」
リヨウチ「ほんとに助かった、ありがと」

イブキ 「どういたしまして。困ったときはお互い様でしょ」

リヨウチ 「ああ……そういえばここに居る人たちって誰かに頼ろうとしないよな、怖いぐらいに」

イブキ 「んーそもそも、人に頼るって考えが無いんだと思うよ。みんな過去に色々あっただろうし」

リヨウチ 「まあ、それもそうか。ここに来ている時点でフツウじゃないしな」

イブキ 「難しいね、フツウって」

リヨウチ 「まっ、フツウじゃない俺らにとってここは救済所だな」

イブキ 「……救済所？」

リヨウチ 「飯が食えて寝床もある。それに仕事も貰えるなんて俺たちにとっては十分すぎるだろう」

イブキ 「ふざけないでよ、芸をして見せ物されて嘲笑われることが救いの！？そもそも舞台に出てたこと無いリヨウチは僕たちの気持ちなんか分からないよね」

リヨウチ 「えっ、違う違うんだイブキ、聞いてくれくれ……」

イブキ 「違くない！何にも知らないくせに口を叩かないで！」

カワバタが下手から出てくる

カワバタ 「お前らちゃんとやってるか」

リヨウチ 「カワバタさん！」

カワバタ 「おつ意外だな、ほとんど終わってるじゃないか。もしかしてイブキに手伝ってもらったのかお前？」

リヨウチ 「あー……えっと……」

カワバタ 「その顔は図星だな。（イブキの方に体を向ける）ほら、イブキを見習え……ってどうした！」

イブキ 「……え？」

カワバタ 「ひどい顔じゃないか！体調が悪いのか？何があった！」

イブキ 「顔に出ていましたか……？嫌だなあ、すっかりしないと……」

カワバタ 「夜まできちんと休息をとっている。おいリヨウチお前は茶でも入れ……はあその身体じゃ危なっかしくて無理か」

リヨウチ 「……すみません」

カワバタ 「……学問が達者だと聞き、会計にでも使えるかと思つて雇つたが……いらん人材を増やすべきではなかったな」

リヨウチ 「つ……」

カワバタ 「芸の一つでも身につけて必要とされる。最低限の努力をしとけ、ここに居る奴らはみんなやってきたことだ」

リヨウチ 「分かりまし……」

イブキ 「まっ……待つてください。リヨウチは会計として雇われたんですよ？」

カワバタ 「ああ、そうだが。何か問題でもあると言うのか？」

イブキ 「だったら彼は舞台に立つ必要はないと思います。約束が違いますよ」

カワバタ 「……おかしいことを言うようになったなあ、リヨウチに影響されたのか……イブキ、痛い目にあいなくては指図をするな」

イブキ 「そんな事は出来ないよね？カワバタさんは」

カワバタ 「……根拠は？」

イブキ 「根拠は、僕がこの小屋一番の目玉商品だから。「盲目のピアニスト」浅草にいる誰がこの名前を知っている、演奏を聞きたがつている。タコ殴りにされた状態で舞台上上がったら一瞬で悪い噂が広がる、ましてや出演できない事になったらこの小屋の存続に関わるからね。」

カワバタ 「偉いなあ……自分の価値を良く分かっているじゃないか、イブキ。お前はよくできたやつだよ、本当に……」
イブキ 「どういたしまして、おかげで指一本も欠けずに今日もピアノが弾けるよ」

カワバタ「息を殺すように笑いながら」そうだなあ…他のやつらみたく、切り捨てなくて良かったよ。それと……リヨウチ、やはりお前は今月限りで辞めさせてもらう。これ以上他のやつらに影響されては困るからな。今夜もこの町と小屋を感動で満たしてくれ、「音の魔術師」。お前の音色は一級品だよ」

カワバタが下手に下がる

イブキ「ああ…あの本当にネーミングセンスが壊滅的だな、」音の魔術師」とかふざけた異名を付けないでよ。ねえ、そう思わない？……リヨウチ？」

リヨウチ「なあ……さっきのこと怒ってないのか？」

イブキ「え？」

リヨウチ「俺、すんげえ酷いこと言っただろ。相手のことを全く考えてなかった。本当に…ごめん」

イブキ「……まってよ」

リヨウチ「謝罪だけじゃ足りないよな！分かった…覚悟は決ってる！さあ、俺を殴れ！！」

イブキ「まってまってまって！！気にする事そこ！？今リヨウチは社長に解雇宣言されたんだよ！クビになって来月から一文無しなんだよ！！」

リヨウチ「あれ？殴らないのか？」

イブキ「僕は非暴力主義者です！って、そうじゃなくて……」

リヨウチ「（不機嫌そうに）解雇の件か？逆にこの態度と能力で今まで居座わられたことが奇跡に近いだろ？」

イブキ「そうだとしても…心配だよ……」

リヨウチ「はは、イブキは優しいんだな。女の子にモテモテになるわけだ」

イブキ「！？ちよ、あんまりからかわないで」

リヨウチ「俺は事実を言っただけ、毎回熱烈な恋文を代わりに貰う気にもなれよ」

イブキ「なるほど！リヨウチも恋文が欲しいんだね。うん、みんなに言っておくよ」

リヨウチ「……（小言で）これはもうド天然王者だな…」

イブキ「ん？なにか言った？」

リヨウチ「いや、ただの独り言。そういやカワバタさんと話している時、顔色悪かったけど大丈夫か？」

イブキ「大丈夫、もう平気。大事な友達が悪く言われているのに黙ってはいられないでしょ？」

リヨウチ「イブキ…お前ほんとに良いやつだな！！」

イブキ「ふふ、ありがとう。でも最近ちよっとした事で気分が落ち込んだり、体調が優れなくなったりするんだよね。特にこれといった心当たりもないし……」

リヨウチ「もしかしたら気持ちの面に問題があるかもしれないな」

イブキ「気持ち…精神面ってこと？」

リヨウチ「ああ、あくまでも予測に過ぎないが…イブキはこの小屋と客から一番注目があるだろう？そのことに大きな重圧を感じたことは無いか？」

イブキ「ある…けど……どうしようも出来ないよ、このことは。僕がこの小屋でピアノを弾きつづける限り何も変えられないんだ」

リヨウチ「じゃあ、ここを出れば解決だな。」

イブキ「……へ？」

リヨウチ「イブキ、どうしてお前はピアノを弾くんだった？」

イブキ「どうしてって……ピアノは小さい頃におばあ様から教えてもらったんだ。この小屋に来た時、偶然ピアノが置いてあつてこれなら僕もみんなの役に立てると思って…弾きつづける理由は簡単だよ。ここに置いてもらうためだ、ただ、それだけ」

リヨウチ「それで？行き場を見失うのが怖くて毎日びびって弾いてますってか？」

イブキ「違う！！そんな、生半可な気持ちで弾いてない！！」

リヨウチ「そんなこと俺が一番分かっている。イブキの音はもつと深い何かを感じるんだ、なんせ毎日特等席から聞いているからな！」

イブキ「特等席って、（クスツと笑いながら）舞台袖のことをそんな風に言うのリヨウチだけだよ。……あのね、実は小さい頃に母が亡くなって、長い間父さんと二人きりで暮らしていたんだ。けど、目を怪我したことをきっかけにおばあ様の家に来てね。父さんと話せる機会がめつきり減ってたんだ。今思うとあの時はかなり寂しかったな…」

音楽・悲しく落ち着いたピアノ

暗転

回想。イブキとリヨウチは上手に戻る

明転

いぶき「ねえ父さん、今日も遅くまでおじい様のお手伝いなの？」

ユウゾウ「ごめんな、仕事が落ち着いたら時間が作れるから、それまでいい子に待っていてくれ」

いぶき「会社って大変な場所なんだね……」

ユウゾウ「んゝ確かに大変だけどとてもやりがいがあるんだよ！うん。」

いぶき「やりがい？」

ユウゾウ「そうだよ、イブキは今ピアノをおばあ様から教わっているだろう？」

いぶき「うん、全然楽しくないけど」

ユウゾウ「うええ！？楽しくないの！お父さん初耳だよ！」

いぶき「だっておばあ様厳しいんだもん」

ユウゾウ「ああ……想像がついてしまう……じゃなくて！例えば、今まで弾けなかった曲がたくさん練習したことによって弾けるようになった。こういった経験はあるだろう、この達成感をやりがいつて言うんだ」

いぶき「じゃあ、やりがいは良いものなんだね。僕ちよつと安心した」

ユウゾウ「安心？どうして？」

いぶき「だって、父さんはいつも苦しい、大変だって思いだけでお仕事をしてないって分かったから」

ユウゾウ「イブキ……ハハハお前、そんなことを気にしていたのか？」

いぶき「えゝ？ダメなの？」

ユウゾウ「いいや、俺の息子として出来すぎたくらいだよ」

いぶき「…父さん、最近あんまり元気ないでしょ。僕、顔は見えないけど何となく分かるよ。無理はしないでね……」

ユウゾウ「心配するな。それより最近、執務室の外からイブキのピアノが聞こえるんだ」

いぶき「えっそうなの！」

ユウゾウ「本当にいつも癒されているよ。だから、もうピアノが楽しくないなんて言わないでくれ」

いぶき「まあ……父さんが聞いているなら少しは楽しい？かな」

ユウゾウ「ならよかった。イブキの音は何というか……人を魅了する音がするんだ。いつか必ず、大きな武器になるよ」

いぶき「武器になる……それ、おじい様も言ってた」

ユウゾウ「みんなイブキのことが心配なんだ、悪く受け止めるな」

いぶき「別にいいけど……あつ、でも楽しいと好きは違うよ！僕は好きで弾いているわけじゃないから」

ユウゾウ「そっかそっか、じゃあいつかピアノが好きになったらさ。一番に教えてくれよ。それと、新しい住まいを見つけたんだ。これからはまた、二人で暮らせるよ」

いぶき「うそっ！本当に……」

ユウゾウ「ああ、せっかくだし新しい家に向かう前にイブキを連れて行きたい喫茶店があるんだ。来週の日曜に裏玄関で集合な。くれぐれも、あの人たちに見つからないように……」

暗転

いぶきとユウソウは下手に下がる

イブキが舞台袖から話す

イブキ 「今思い返せば、あの頃から父さんの様子がおかしかった。いや違う、逆に怖いぐらい落ち着いていたんだ。だってそうだろう、実の息子を見捨てる覚悟があの時すでに出来ていたのなら辻褄が合う。僕がもっと早く変化に気づいて何か行動を起こしていれば今と違う未来が……」

イブキとリョウチがくる

明転

リョウチ 「イブキ…イブキ！おい大丈夫か？」

イブキ 「えっ…あ、ごめん。ちよつと思いい出しちゃって」

リョウチ 「悪いまた踏み込んだことを……」

イブキ 「ねえリョウチ、僕分かったよピアノを弾きつづける理由」

リョウチ 「聞いてもいいか」

イブキ 「僕はたった一人、自分を心の底から愛してくれた人とまた再開するために弾くんだ。その人は僕のピアノが大好きで：

だからもし浅草に来たらすぐ僕に気が付くよ」

リョウチ 「そっか……話してくれてありがとな」

イブキ 「僕こそ、話して気持ちが整理されたよ。リョウチって何でもお見通しってところあるよね。自分でも気が付かなかった

悩みの原因を推察できるし……」

リョウチ 大した事ねえって、細かい数式を読むより分かりやすいよ

イブキ 「数式……勉強得意だったの？この小屋でも会計として雇われていたし」

リョウチ 「あゝ得意っていうか、俺の両親が研究者で勉強には特に厳しくてさ、兄弟もそれに従っていたんだ」

イブキ 「そうだったんだ…あんまり今のリョウチからは想像付かないな」

リョウチ 「まあ、小さい頃は真面目で優秀だったよ」

イブキ 「……自分で言うんだ」

リョウチ 「俺さ作家になりたいってイブキに言ったじゃん？」

イブキ 「うん、言ってたね」

リョウチ 「それもさ多分この環境のおかげなんだ。ほかの兄弟に成績を比べられたり、色々ときつい暮らしはあったけど、そんな生活を救ってくれたのが本だったんだ。読んでいるうちに自分でも書いてみようって思ったのがきっかけ。両親に読むことは許されたのに、書くことは禁じられてさ…勉強の妨げになるって言われてしまいは、お気に入りだった本や自分が書いた小説の原稿まで燃やされた。その時、今までの仕打ちが重なって衝動的に家を飛び出したんだ」

イブキ 「それで……？」

リョウチ 「それでこのさまだよ。偶然通りかかったバスに引かれて両足を失ったんだ。すぐに病院に行って手術を受けられたから、それ以上の被害が無かった事だけが不幸中の幸いだな。で、色々あってここに売り飛ばされたわけ」

イブキ 「リョウチはさ、未練とかは無いの？元々は五体満足だったわけだし…両親に対して腹が立ったりしないの？」

リョウチ 「まあある日突然、こんな不自由ある暮らしになったし最初は色んな事を恨んだよ。親に物書きのことを説得していればなあとか、そもそも本自体に出合っていなければこんな事になっていなかった！…とか、本当に思ったよ。でも……俺は今、こうなった自分以後悔や絶念はない。だって、もしあそこで助かっていたら今みたく小説を書いていなかったかな」

イブキ 「いつも、仕事を早めに切り上げて真剣に何かを書いていた正体はそれだったのか。なるほどなるほど」

リョウチ 「え！？何で仕事をサボって書いているって知ってたんだ……」

イブキ 「ああ……終わらせていたんじゃないかってサボってたんだ……」

リョウチ 「イブキ……お前まさか本当は見えていたりして…」

イブキ 「それはありません！だって、仕事をしている時と全く筆の音が違うんだもん」

リョウチ「音の違い？」

イブキ「なんて言うか、真剣な時はサツサツサつてしてるの」

リョウチ「……全然分かんねえ」

イブキ「それは置いておくとして……リョウチはさ、解雇された事によって大事な制作場所を無くしたわけだけど。本当にこれからどうするの？」

リョウチ「どうするって、ある程度の自信作は完成しているからここを出て出版社に行く予定。そんで晴れて作家に……」

イブキ「うえええー！そんな簡単になれるものなの！？ここを出るって移動は！住まいは！ど、どうするの！？」

リョウチ「そうだよなあ…俺一人では思い通りに行動すらできないし」

イブキ「うんうん！だからカワバタさんに一緒に謝りにいこう！あの人何だかんだ言って優しいから大丈夫だよ、ほら早く…」

リョウチ「だから、イブキお前の力が必要だ。俺と一緒にここを出よう！」

イブキ「ここを出るって…ちよつと待って！話が急すぎるよ。そもそも僕がここを離れる理由はないし…今さっき説明したばかりだよね！」

リョウチ「ああしつかりこの耳で聞いたよ」

イブキ「だったらどうして……」

リョウチ「再開したい人がいるんだろ？だったら浅草にとどまっているのはもったいなすぎるよ」

イブキ「で、でもここで僕と別れたから向こうは僕の居場所を知っているわけだし、無理に離れようとしなくても……」

リョウチ「自分が愛している人を見放した場所にまた出向こうと思うか？」

イブキ「それは……」

リョウチ「もし仮に来るとしてもずっと先の話になる。そしたらさ、ここに閉じこもっているより全国各地を回って、名を馳せたら、向こうは気が付けないなんて出来ないって状態になるだろう！」

イブキ「……あのさ、僕のピアノは沢山の人に通じるかな？」

リョウチ「あつたり前だろ！大丈夫だ、この俺が保証する。ここにどまるのは本当に勿体ないくらいだよ。それに…俺自身、イブキのピアノが大好きだからもっと多くの人に知ってもらって好きになつてほしいというのが本音」

イブキ「大好きか……ねえ、リョウチ。浅草を離れる前に寄りたい所があるんだけど、いいかな？」

リョウチ「もちろん！っあ、えー！一緒に行ってくれるのかー！」

イブキ「うん！僕もなんだか考えが変わっちゃった。いや、変わったっていうより今すごくワクワクしてる！」

リョウチ「俺もすんげー同じ気持ち、それで寄りたい所って？」

イブキ「あのね、父さんと離れる前、最後に喫茶店に行ったんだ。その店が浅草にあることは分かっているんだけど具体的には覚えていなくて…」

リョウチ「喫茶店か、前々からよく見かけるな」

イブキ「それでね、その喫茶店でクリームソーダを食べたんだ」

リョウチ「クリームソーダ……どの店も置いてある定番商品だから特定がしづらいな…何か少しでも特徴を覚えてたりしないか？」

イブキ「んー、味だと分かりづらいしな……あ！父さんがクリームソーダがきた時、海みたいで綺麗だって言ってたよ！」

リョウチ「海？海ってことは青色だろ…？クリームソーダってめろんソーダの上にあいすくりんが載っている飲み物だから緑色のはずだよな…？」

イブキ「え！そうだったの！」

リョウチ「少なくとも青いクリームソーダは聞いたこと無いな」

イブキ「あゝ確か食材が切れているから他のに代用したと言ってたっけ、もう三年前の事だからな」

リョウチ「じゃあどこ適当な喫茶店に入るか？」

イブキ「ううん、良いんだ。どのみち、あのクリームソーダは食べれないしね」

リョウチ「そうか」

カワバタが袖からでる。

カワバタ「イブキ！開演の時間だ、用意をしろ！」

イブキ「あ、はい！分かりました」

カワバタが下手に下がる

リヨウチ「……イブキ、この先俺たちはきつと上手くいく事ばかりじゃないだろう。時には楽しくて幸せで、時には困難や辛い現実が沢山ある」

イブキ「そうだね、やっぱり小屋を出なければよかったって思う日もあるかも知れない。でも大丈夫、だって僕たちは一人じゃないから。何にだって挑戦できるよ」

リヨウチ「そうだな…互いが欠けているところを補い合う。これが俺たちの生き方であり、戦い方だ」

イブキ「うん！」

音楽・開演のブザーが鳴り、お客さんのガヤガヤした声が聞こえる

イブキ「時間だ、もう行くね」

リヨウチ「今日も特等席で聞いているよ」

イブキ「うん。これが終わったなら小屋を出るからここで弾くのは今日で最後か…」

リヨウチ「いや、ここからが俺たちのスタートだ。今日も最高の音をみんなに届けてくれ、イブキ」

イブキ「そうだね、それじゃあ……いってきます」

リヨウチ「いつてらつしい」

暗転

リヨウチが上手に戻る

音楽・お客さんの声が段々と大きくなり、ピアノが流れる

明転

イブキ「ねえ、父さん。僕は今、ピアノが大好きだよ。それとね、僕のピアノが好きだって言ってくれる友達が出来たんだ。この話を聞いたらきつと驚くよね。……いつか再会したらもう一度あの日と同じクリームソーダを食べに行きたいな。父さん、どこかで僕ピアノを聞いていてね。どこまでも響かせるから………」

暗転

音楽・ラジオ

ラジオ「それでは、そろそろお別れのお時間です！昭和二十年、二月七日。現在の時刻は午後九時を回ります。本日もあつという間でしたね。次回もお楽しみに！皆さん、おやすみなさい！………」

ビルマシヤン高原（現ミャンマー）・洞窟壕・夜

良一と博也は床に隣り合わせで座っている。良一はブランケットをかけていて、本を持っている。

音楽・暖炉の音

明転

良一「そうして、盲目のピアニスト、イブキは今日も浅草の町を感動で満たしましたとき。なあ、博也。久々の新作はどうだ？」

博也「……………」

良一「あゝやっぱり庄巻して言葉も出ないか。わかるぞ、その気持ち！俺も自分で執筆して正直、目がうるってしたからな！」

博也「ああそうだな。僕も久しぶりに戦況以外のラジオ番組を聞けたからすごく感動したよ。まあ、最悪なことに良一の声がデカすぎてほとんど聞こえなかったけど」

良一「そっち……！俺の素晴らしい小説じゃなくてラジオに傾聴していたのか！？これ全文読むの結構大変なんだぞ！」

博也「誰も悪文を読み聞かせるなんて言っていない」

良一「ダメだ、俺の幼馴染が優しさを忘れてる」

博也 「はあ……良一はすごいよ。こんな事があった直後に不謹慎極まりない物語が書けるなんて、ほんとお前だけだよ」

良一 「……俺さ、両足を失ってハッキリと分かったんだ。俺の手は筆を持つために残されたんだって。銃や手榴弾なんかじゃない。この小説は俺にとつて、ずっと叶えたかった夢の再スタートなんだ」

博也 「夢…昔はさ、暇さえあれば良一が書いた小説を二人でよく読んでいたよね」

良一 「そうそう！博也は読むのが死ぬほど遅かったから、途中から俺が朗読しちゃうんだよね」

博也 「人が楽しく読んでいたのに、勝手に本を取り上げて……大迷惑だったなあ……」

良一 「悪かったって……！そんなに怖い顔するなよ」

博也 「それはともかく、この物語に出てくるイブキって人物、視力の部分を除いて、昔の僕に寄せすぎだろ」

良一 「だってこれ、博也を励ますための小説だから。登場人物が自分とよく似た性格や状況の方が感情移入しやすいだろう？

この小説を読んで今の自分と重なって、勇気や希望とか頑張ろうって気持ちになったら良いなって考えたんだ……」

博也 「それで、視力を失って落ち込んでいる僕を励まそう、と」

良一 「し、仕方がないだろう！本を書いて元気づけさせる事くらいしか俺には出来ないし……」

博也 「お前って、昔から本当に不器用だよな……」

良一 「うっ……否めない……」

博也 「まっ、良一にしてはよくできた方なんじゃない？」

良一 「本当か！」

博也 「うん、良い現実逃避になったしね」

良一 「現実逃避……か……。なあ、博也はこの小説を聞いてどう思った？」

博也 「気分が悪くなったな。それに、ピアノをもう一度始めろって圧がすごかった」

良一 「それは……ごめん」

博也 「どうして謝るんだ？」

良一 「どうしてって……あの日のことを思い出させたかもしれないから。俺が本を大切にしているのと同じくらい、博也は音楽を愛していたから」

博也 「……ピアノを手放した日か。確かに、思い出したくないな。あの時は特に戦況が厳しくてピアノどころじゃ無かったんだっけ」

良一 「それでも……俺は博也にもう一度、ピアノを弾いてほしい」

博也 「良一って、不器用なだけじゃなくて酷い人間でもあったんだね」

良一 「だな、俺は酷いやつだ。でもそれ以上に友と幸せな人生を歩みたいんだ。俺たちは戦場で地獄を味わった、だからこそ自分の好きな事が出来ていたあの日々のありがたみを今一度知れたんだと思う。博也……今もピアノは好きか？」

博也 「……っ大好きだよ。ほんとに、イブキってやつが羨ましいよ」

良一 「あの話、リョウチとイブキが小屋を出ようとする所までしか書かれていなかったら？」

博也 「言われてみれば……一番読者が知りたくなる、二人のその後が無かったね」

良一 「あれ実はわざと書かなかったんだ。どうしてかって言うと……物語の続きを二人で実現させたいから。俺が作家になって、博也がピアニストになるんだ。どう？最高の未来図だろ！」

博也 「物語の続きって……あの話は夢物語に過ぎないだろう！大体、今更ピアノなんて……」

良一 「できるよ。博也なら絶対にできる。だって、博也のピアノ愛は俺が一番知っているからな」

博也 「愛だけで物事を語るな、でも……」

良一 「でも？」

博也 「……家に帰ったら、また弾くのもありだな。」

良一 「え……！本当か……！」

博也 「怪我を負っても好きな事が出来るって、幸せな人間だな、僕は」

「俺も同じ気持ちだ」

博也 「そういえば……あの物語ってどうして青いクリームソーダを題材にしたんだ？そもそも、二人で喫茶店なんか行っちゃった？」

良一 「あゝそれはな……じゃーん！！この手紙を読んで発想が生まれたんだ！」

博也 「へへ、誰からきたんだ？」

良一 「実は、小梅からの手紙なんだ！」

博也 「小梅さんか！」

良一 「いやゝ絶対に送るねって言われたから、中々来なくて心配だったよ」

博也 「小梅さんが元気そうで良かった。確か、最近結婚されたよな？」

良一 「ああ、もう一年前の事だけどな。実の弟なのに、まだお義兄さんに挨拶すらできてないよ」

博也 「僕もずっと世話になってたから顔を合わせたいな」

良一 「俺たちの格好見たらどう思うかな……俺なんか身長が半分になったわけだし」

博也 「生きて帰ってこれるだけで、満点だよ。怪我なんか軽い方だ。それで、手紙にはなんて書かれていたんだ？」

良一 「えっと、浅草の喫茶店でクリームソーダを食べた日の出来事がひたすらに書いてあったよ。余程うまかったんだろうな」

博也 「そうか、クリームソーダって緑色だけじゃないのか。どんな味がするんだろ……食べてみたいな」

良一 「ああゝそれが、青いクリームソーダは存在しないんだ」

博也 「え？」

良一 「だってだって！普通すぎたら何というか……話の印象が薄いだろう！だから、一捻り入れようと思って……」

博也 「つまり、良一の創作物ってことか。」

良一 「期待させたみたいで悪かったな」

博也 「別に、無いものは作ればいい話だろ」

良一 「へ？作る？」

博也 「白いあいすくりんに、青いソーダ水……実際にあったら、相当綺麗だと思うよ」

良一 「なにそれ……めっちゃくちゃ良い提案じゃねーか！！自分たちじゃ手に入れづらい材料だから、どこかの喫茶店にこの案を持っていこう！それでもし、評判が良かったら、俺の小説と一緒に青いクリームソーダを宣伝できるな！！」

博也 「あはは、話が早すぎるよ！」

良一 「わりい……いつもの癖が出てた」

博也 「そうそう、良一はいつも人をわくわくさせる未来を話すよね。ま、そのおかげで僕は隣で楽しく笑ってられるよ」

良一 「どういたしまして」

博也 「そういうえば、子供の頃もこんなことがあった……」

音楽・飛行機の通過音

博也 「なあ、今何か聞こえなかったか……？航空戦のような音が……」

良一 「そうか？俺は気が付かなかったけど……」

博也 「聞き間違いか……なら大丈夫だ、問題ない」

良一 「いいや、ちよつと心配だから見てくるよ。博也はうちの隊で一番耳が良いし、少しでも外で変化があったら報告した方がいいだろう」

博也 「それもそうだな……ていうか、それで歩けるのか？」

良一 「ああ大丈夫だ……っと！」

博也 「はあ……昼間よりかなり冷え込むな。良一、隙間から何か見えるか？」

良一 「んゝ……駄目だ！背丈が足りなくて全く見えん！！」

博也 「だよなあ……僕は目が見えないし……」

良一 「……とりあえず、ここですばらく待機してるか」

博也 「うん、それがいいね」

良一 「あのさ……さっき言ってた提案が、実現できたら本当にあの小説の続きが迎えられるな」

博也 「そうだねえ……あー！昨日まであんなに落ち込んだのがウソみたいだよ。良一の小説は人を救う力がある。この汚い戦場に閉じ込めておくのは勿体ないよ」

良一 「博也……柄でもないこと言うなよ」

博也 「昔の僕みたいで素直でしょ。あとさ、良一、今顔真っ赤でしょ」

良一 「えー！何で分かるんだ！」

博也 「何年幼馴染やってると思うの。早くこの小説がみんなの手に渡ると良いね」

良一 「あーでも、これ博也のためだけに書いたから万人受けするかな……？」

博也 「大丈夫だよ、多くの人に届く話じゃなくていい。伝えたい人に伝わる事が大事なんだ」

良一 「うん、そうだな。ありがとう、博也」

博也 「ふふ、どういたしまして……」

音楽・飛行機の通過音が大きく鳴り、遠くで爆発音が響く。

博也 「痛つ……おい、良一大丈夫か！すぐに報告を……」

良一 「あつ……博也、危ない……！」

暗転

音楽・大きな爆発音が鳴る。

良一 が持っていた本を舞台前方に投げ出す。

良一 と博也が去る。

音楽・ピアノ

明転

見世物小屋・小屋の北側・夕方

良一 が本の手前に座っている。

リヨウチ 「あゝ疲れた……たくつ、カワバタさんは人使いが荒すぎるんだよ。あれ……こんな所に本なんて落ちてたっけ」

イブキ が舞台上手から現れる。

イブキ 「リヨウチ……どこ行つたの……」

リヨウチ 「……ん？イブキか？おーい、こつちこつち！」

イブキ 「あーいた！こんな所にいたの！」

リヨウチ 「しー！あんまり大きな声出すなって、サボっているのがバレるだろ」

イブキ 「いや、僕はそのリヨウチを戻そうとしてこつちに来たんだけど……」

リヨウチ 「んなこと良いんだよ。そんなことより、見るこれ！」

イブキ 「ん？何かあるの？」

リヨウチ 「こんな人気のないところに本が落ちていたんだよ！」

イブキ 「へーめずらしいね」

リヨウチ 「どれどれ……えつ、2024年発行……？」

イブキ 「えー！2024年って今から100年後の事じゃん！ねえ、どんな本なの……？」

リヨウチ 「えーっと、浅草にある、とある喫茶店に偶然置いてあった一冊の本が大ヒットした名作。な……ナチュラルド天然の少年と我が強い少年二人の物語。本とピアノを愛す彼らは互いに足りぬモノを補い合う、ちよつぱり切ない物語——だつてよ」

イブキ 「なちゅ……すこいね！未来は難しい言葉が沢山あるんだ！それに、少し僕らに似ているね」

リヨウチ 「そうか……？こんな偶然だろ」

イブキ 「だとしても凄いよ！そもそも、未来の本と出逢えるなんて！」

リヨウ 「あ、待つて。まだ背表紙に何か書いてある。……これは、ある一人の学徒兵によつて書かれた物語です。ビルマ・シ

ヤン高原にて夜間戦闘機に撃たれ亡くなった彼は友人を励ますためにこの小説を執筆したと、手帳に書かれています。彼の、最後の作品でした」

イブキ 「ねえ……この小説の題名は……？」

リヨウチ 「『伝説のクリームソーダ』」

《《完》》